【学生平和学会(2020 年 3 月）レジュメ】

戦間期ドイツにける平和への試み

―M・ヒルシュフェルトによるセクシュアル・マイノリティ運動を事例に―

九州大学文学部西洋史学研究室 3 年

松口優花

0. はじめに

1）構造的暴力としてのセクシュアル・マイノリティ差別の問題

―ヨハン・ガルトゥング(2003)：「構造的暴力」

；社会における差別構造が生み出す間接的な暴力

―セクシュアル・マイノリティ差別：「ホモ／ヘテロ」の二項対立

―セクシュアリティ研究・クィア研究の発展

クィア研究；異常／正常という二項対立を社会的構築物と捉え

その可視化、脱構築化を目指す

2）ドイツ近現代史及び大戦期／戦間期研究における「同性愛」研究

―ジェンダー・セクシュアリティ史／クィア史の持つ可能性

：規範構築と再生産のプロセスを提示し得る【藤田　2017】

―戦争と「性」:【星乃　2006】【ヘルツォーク　2012】

―ヴァイマル期：「性」のボーダーが流動する時代【オールドリッチ　2009】

―近代国家形成に伴うジェンダー規範の構築／戦後の女性進出／男性同盟

―刑法 175 条の制定(1871)／オイレンブルク事件(1907)

―ゲイ・レズビアンサブカルチャーの振興／同性愛解放運動の発展

3) 主題：M・ヒルシュフェルトの戦間期ドイツにおける活動を通して、彼の持つクィア的視点を明らかにするとともに、それに基づく運動と葛藤を提示する

① 日本における先行研究に基づく彼の大まかな活動

② ヴァイマル期における性科学研究所を中心とした彼の活動

③ 彼の持つクィア的なまなざしとそれ故の葛藤

1. M・ヒルシュフェルトの活動と時代背景

：1870-1940 年代「同性愛が戦闘的になった時代」（オールドリッチ　2009）

1) ～1914 年：【谷口　2004, 2010】

—医学・科学の発展と「同性愛」の発見

ベルリンにおけるゲイのサブカルチャーの振興

振興マスメディアのスキャンダル；オイレンブルク事件

—同性愛解放運動の開始(1896)、科学的人道委員会(WhK)の設立(1897)

—刑法 175 条の廃止を目指す同性愛解放運動

—『ベルリーン第三の性』

→啓蒙により同性愛への誤解や偏見を解消することを目指す。

2) 1914～1929 年：【星乃　2006】

—民間組織による運動の活発化；女性運動／性病撲滅運動／男性同盟

—性科学研究所の設立(1919)と性科学運動の展開

—“transvestism”「異性装」の提唱→多様な性のヴァリエーションの提示

—“First Conference for Sexual Reform on a Scientific Basis“組織(1921)

3) 1929 年～：【星乃　2006】

—世界恐慌後の経済・政治の不安定とナチの急速な勢力伸張

—“World League for Sexual Reform”組織(1929)

—性科学の国際会議を母体とする、同性愛の承認を要求

—ナチ内部の同性愛性の指摘／ナチとの対話路線への試み

—研究所の破壊・閉鎖(1933)

2. ヴァイマル期における性科学研究所を拠点とした M・ヒルシュフェルトの活動

1) 性科学研究所の機能

—研究、医学実践、カウンセリング

—アーカイブ、美術館、「展示」

2) マスメディア・出版

—映画“*Anders als die Andern*”の脚本の共同制作

—科学研究・大衆化・政治・商業の相互作用の利用

3）研究

—性病や売春といった幅広い問題への関心の高まり：

—*Geschlechtskunde, auf Grund dreißigjähriger Forschung und Erfahrung bearbeitet* (Stuttgart, 1926-1930)

—戦争と性との関連：『戦争と性』（ヒルシュフェルト　2014）

—"Sexualethnologie"「性民族学」[1]（Hirschfeld 2006）

3. M・ヒルシュフェルトのクィア的なまなざしと、活動における葛藤

1）活動に見られる彼のクィア的なまなざし

① ジェンダー・セクシュアリティにおける分類し得ないグラデーションの認知

—ジェンダー・セクシュアリティのコンビネーションの無限の可能性[2]の指摘

—Multiple Sexual Intermediary Stages(fg.1)

中性者と異性装者とホモセクシュアルの流暢なコネクション[3]を提示

—世界旅行記、日本歌舞伎の女性役観察

伝統後継人、異性装者、ホモセクシュアルの間には

「「全ての過渡期の形(alle Übergangsformen)」が存在する」[4]

② 同性愛に限らない幅広い問題の焦点

—女性問題や人種問題も規範構築による差別問題として扱う

2）活動における葛藤

① アウティングに対する恐怖：刑法 175 条の存在

② 医学・科学と、マイノリティ擁護者としての解放運動との両立の困難

—Die Transvestiten(1910)；異性装者とホモセクシュアルを差異化

—軽蔑や法的な処罰からの異性装者の保護のため

—異性装者とホモセクシュアルに分類しがたい存在の認知

—性(プライベート)を公的議論の問題にするほどプライバシーの保護は希薄化[5]

③ カミングアウトの強要

—近代化で生まれた公私の二項対立がもたらすパラドクス

—自己表現／主張、覗き見／展示、と言った緊張したバランスを晒す展示[6]

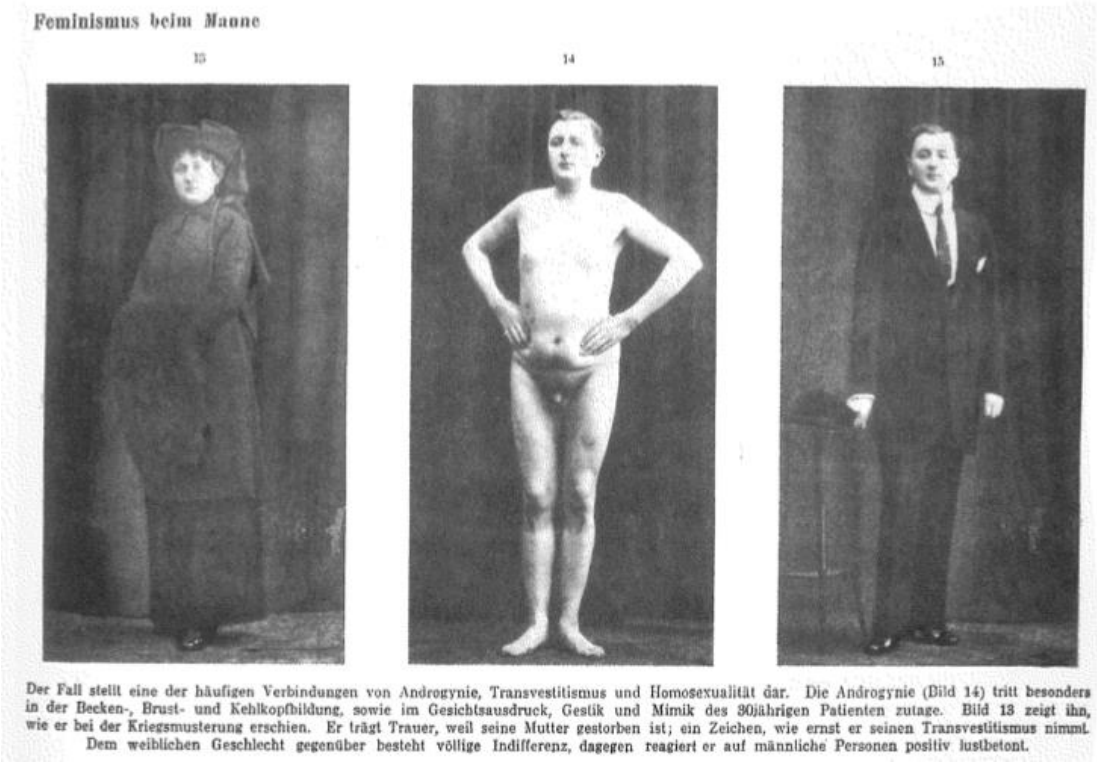
4. おわりに

—M・ヒルシュフェルトのクィア的な視点による実践・研究と葛藤

―ヴァイマル期における現代にも見られる運動の戦略と課題の登場

【注・引用】

fg.1 ：Taylor, Timm, and Herrn, eds. (2017) p.43



1．Hirschfeld (2006), p.27.
導入“Sexuelle Völkerkunde”において、“Sexualethnologie”を性科学の一分野として紹介し、主にアジアを中心とした 1931-32 年の彼の世界旅行を Sexualethnologie の研究旅行として自ら位置付けた。

2．Taylor, Timm, and Herrn, eds. (2017) p.17.
“Hirschfeld used fixed catefories that actually negated the most revolutionary implications of his central scientific insight: that［…］neither gender nor sexuality could be described as a simple binary system; that each individual person is a unique combination of gender characteristics, male and female; and that an infinite spectrum of possible combinations existed between masculine and feminine attributes.”

3．Ibid., p.27.
“The image, again a triptych, shows the same person dressed as a man, naked[…], and as a woman in a dark dress. The caption points first to the form of the torsc in the naked image, as well as the face and bodily comportment of subject, as evidence for the “frequent connection between androgynouness, transvestitism, and homosexuality”.

4．Herzzer (2017) p.355.

5．Taylor, Timm, and Herrn, eds. (2017) p.16-17.

6 . Taylor, Timm, and Herrn, eds. (2017) p.25.

【参考文献】

(洋語文献)

・Hirschfed, Magnus, *Die Weltreise eines Sexualforschers im JAHRE 1931/32,* (Eichborn Verlag, Frankfurt am Main 2006).

・Herzzer, Manfred, *Magnus Hirschfeld und seine Zeit*, (De Gruyter Oldenbourg, Berlin/Boston 2017).

・Taylor, Michael Thomas. Timm, Annette F. and Herrn, Rainer, eds. *Not Straight from Germany - Sexual publics and sexual citizenship since Magnus Hirschfeld,* (University of Michigan Press, 2017).

(邦語文献)

・オールドリッチ、ロバート編著/田中英史・田口孝夫訳(2009)『同性愛の歴史』東洋書林。【Robert Aldrich*, Gay Life and Culture - A World History*, (Thames & Hudson Ltd, 2006)】

・石井香江(2004)「ドイツ男性史研究の展開と課題：近年のドイツ近現代史研究を事例として」『歴史學研究』844、32-41 頁、青木書店。・加藤千香子(2008)「「男性史」と歴史学」『歴史學研究』844、32-50 頁、青木書店。

・ガルトゥング、ヨハン・藤田明史(2003)『ガルトゥング平和学入門』117-118 頁、法律文化社。

・川越修(1995)『性に病む社会』山川出版社。

・キーズ、ヴィンセント・風間孝・河口和也(1997)『ゲイ・スタディーズ』青土社。

・佐藤文香(2010)「テーマ別研究動向（男性研究の新動向）：軍事領域の男性研究に向けて」『社会学評論』61(２)、186-195 頁、日本社会学会。

・谷口栄一(2004)「マグヌス・ヒルシュフェルトと科学的人道主義委員会（WhK）」『大阪府立大学言語文化研究』3、21-33 頁、大阪府立大学言語文化研究会。

・谷口栄一(2010)「ヒルシュフェルトの『ベルリーンの第三の性』を読む: 近代都市の同性愛者群像」『言語と文化』9、89-102 頁、大阪府立大学総合教育研究機構。

・ヒルシュフェルト、マグヌス著／高山洋吉訳(2014)『戦争と性』

・藤野裕子(2017)「１ジェンダーⅠ　男性史とクィア史」『第４次現代歴史学の成果と課題　１新自由主義時代の歴史学』114-127 頁、績文堂出版株式会社。

・ヘルツォーク、ダグマー著/川越修・田野大輔・萩野美穂訳(2012)『セックスとナチズムの記憶―20 世紀ドイツにける性の政治化』岩波書店。【Dagmar Herzog, *SEX AFTER FASCISM －Memory and Morality in Twentieth*-Century Germany, (Princeton University Press, 2005)】

・星乃治彦(2006)『男たちの帝国：ヴィルヘルム２世からナチスへ』岩波書店。